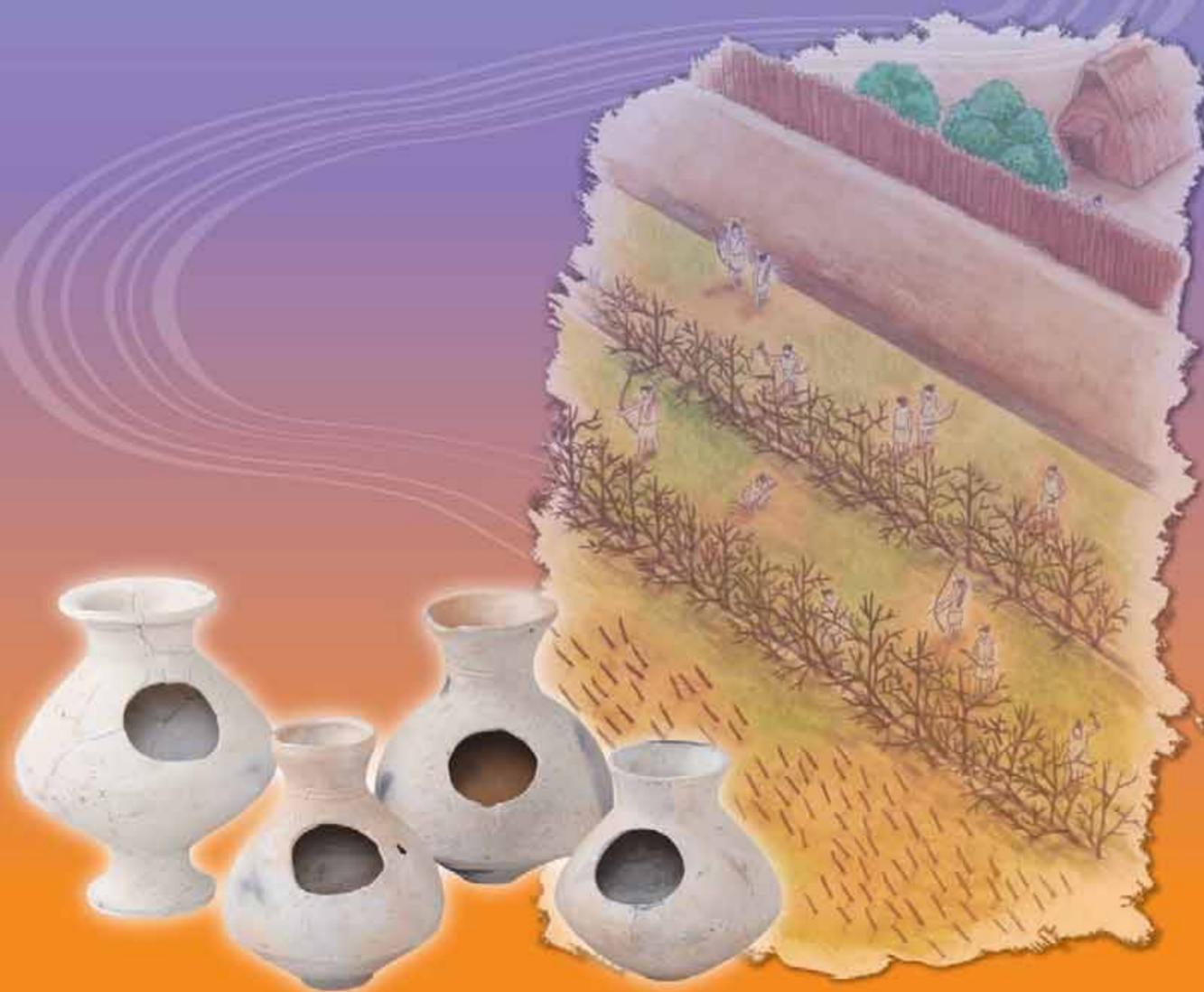


国重要文化財指定記念展

朝日遺跡

よみがえる弥生の枝

朝日遺跡
よみがえる弥生の枝



愛知県教育委員会

愛知県教育委員会

ごあいさつ

朝日遺跡は、清須市、名古屋市西区に所在する、弥生時代の大規模な環濠集落^{かんごうしゅうらく}です。昭和40年代以降、名古屋環状二号線の建設に伴って大規模な発掘調査が行われ、逆茂木・乱杭^{さかもぎらんくい}などからなる強固な防御施設、埋納された銅鐸^{どうたたく}、玉作りの工房跡など、重要な発見が相次ぎ、東海地方を代表する弥生集落として、その名が知られるようになりました。発掘調査では膨大な遺物が出土し、これらの出土品は、弥生時代の多様な生業、生産・流通の様相を考証し、精神生活を推察するうえで極めて重要な資料として評価されています。

このたび国の文化審議会の答申を受け、愛知県教育委員会および愛知県埋蔵文化財センターの発掘調査で出土した主要な遺物2,028点が国の重要文化財に指定されました。その内容は、土器・土製品727点、木器・木製品253点、石器・石製品650点、ガラス小玉121点、金属製品37点、骨角牙貝製品240点と多岐にわたります。

愛知県では、この貴重な文化遺産を、将来にわたって大切に保存するとともに、広く県民のみなさまにご覧いただく機会を設け、文化財を活用した文化力の向上、地域の活性化に取り組んでまいります。本展覧会では、重要文化財に指定された出土品を中心として、土器、石器、木製品、骨角製品、金属製品など、朝日遺跡の高度な「ものづくり」の技術に焦点をあてて紹介していきます。わが県が誇る弥生文化の至宝をぜひご覧ください。

平成25年3月20日

愛知県教育委員会教育長 野村 道朗



目次

よみがえる朝日遺跡

東海最大の弥生集落...2 / 強固な防御施設...6 / 大規模な貝塚...8 / 住居...9 / 墓...10 / 埋納された銅鐸...11 / 弥生人のなりわい...12

東海弥生文化の至宝

木製品 ~ 弥生の匠

木製農具...16 / 木製容器...17 / 武器形木製品...19 / 鳥形・舟形・木偶...20

骨角牙貝製品 ~ 精緻な芸術品

骨角製狩猟具・漁労具...21 / 骨角牙製装身具...23 / 骨角製品の装飾...25 / 紡錘車と縫い針...26 / 祭祀具...27

金属製品・ガラス製品 ~ 古代のハイテク

銅鐸...28 / 青銅製品...30 / 鉄斧...32 / 金属器の製作...33 / ガラス小玉...34

石器・石製品 ~ 石の工芸品

石鏃...35 / シカの骨に刺さった石鏃...36 / 石の武器...37 / 収穫具...38 / 磨製石斧...39 / 勾玉・管玉...41 / 玉作り関連資料...42

土器・土製品 ~ 弥生の造形

弥生時代前期の土器...43 / 弥生時代中期の土器...44 / 弥生時代後期の土器...46 / 弥生時代終末期から古墳時代前期の土器...47 / 沈線文系土器...48 / 円窓付土器...49 / 赤く塗られた土器...50 / S字状口縁台付甕...53 / 台盤状土製品...54 / 鳥形土製品...55 / 描かれたシカ...56 / 銅鐸形土製品...57 / 顔の造形...58

発掘調査のあゆみ

発掘調査史...60

発掘調査報告書...61

例言

本書は、平成24年3月30日に発行した『朝日遺跡—発掘調査と出土品—』をもとに、国重要文化財指定記念展「朝日遺跡、よみがえる弥生の技」(会期：平成25年3月20日～5月19日、会場：愛知県清洲貝殻山貝塚資料館)の展示解説書として再編集したものである。

本書の構成は、展示構成とは異なる。また、本書掲載資料と展示品は同じではない。

本書に掲載した資料のうち、重要文化財指定品をふくむ写真には、「重要文化財」とキャプションに表記した。

本書に掲載した図、イラスト、写真は、愛知県教育委員会、公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターが所有・保管している。キャプションに県埋蔵文化財センター、奈良文化財研究所と表記したものを除き、愛知県教育委員会の所蔵である。

本書に掲載した出土品は、愛知県埋蔵文化財調査センター、愛知県清洲貝殻山貝塚資料館において収蔵・管理している。

本書の編集・執筆は、愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室原田幹が担当した。

よみがえる朝日遺跡

東海最大の弥生集落

強固な防御施設

大規模な貝塚

住居

墓

埋納された銅鐸

弥生人のなりわい



東海最大の弥生集落

朝日遺跡に集落が開かれたのは弥生時代前期のことである。当初は小規模な集落だったが、中期初頭には大きな集落へと飛躍的に発展した。

イラストは、発掘調査の成果から、最盛期の朝日遺跡を復元して描いたものである。遺跡の中央を谷が走り、谷をはさんだ両岸に居住域が形成される。居住域のまわりには環濠かんごうと呼ばれる堀がめぐり、その外側は逆茂木さかもぎや乱杭らんくいなどの防御施設によって守られていた。また、玉作りの工房跡が見つかっており、特殊な生産活動に従事した人々も住んでいた。居住域に隣接して大規模な墓域が営まれ、溝で区画された墓ほうけいしゅうこうぼ（方形周溝墓）が連綿と築かれていた。

最盛期には1000人以上の人々が生活していたと推定され、遠隔地との交流も盛んに行われていた。多くの人とモノが行き交う朝日遺跡は、東海地方でも最大の弥生都市として栄えていた。



1 弥生時代中期の集落景観



2 南上空からみた朝日遺跡周辺（2007年撮影） 写真：県埋蔵文化財センター

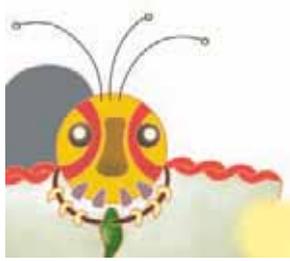


3 遺跡の位置

遺跡の立地

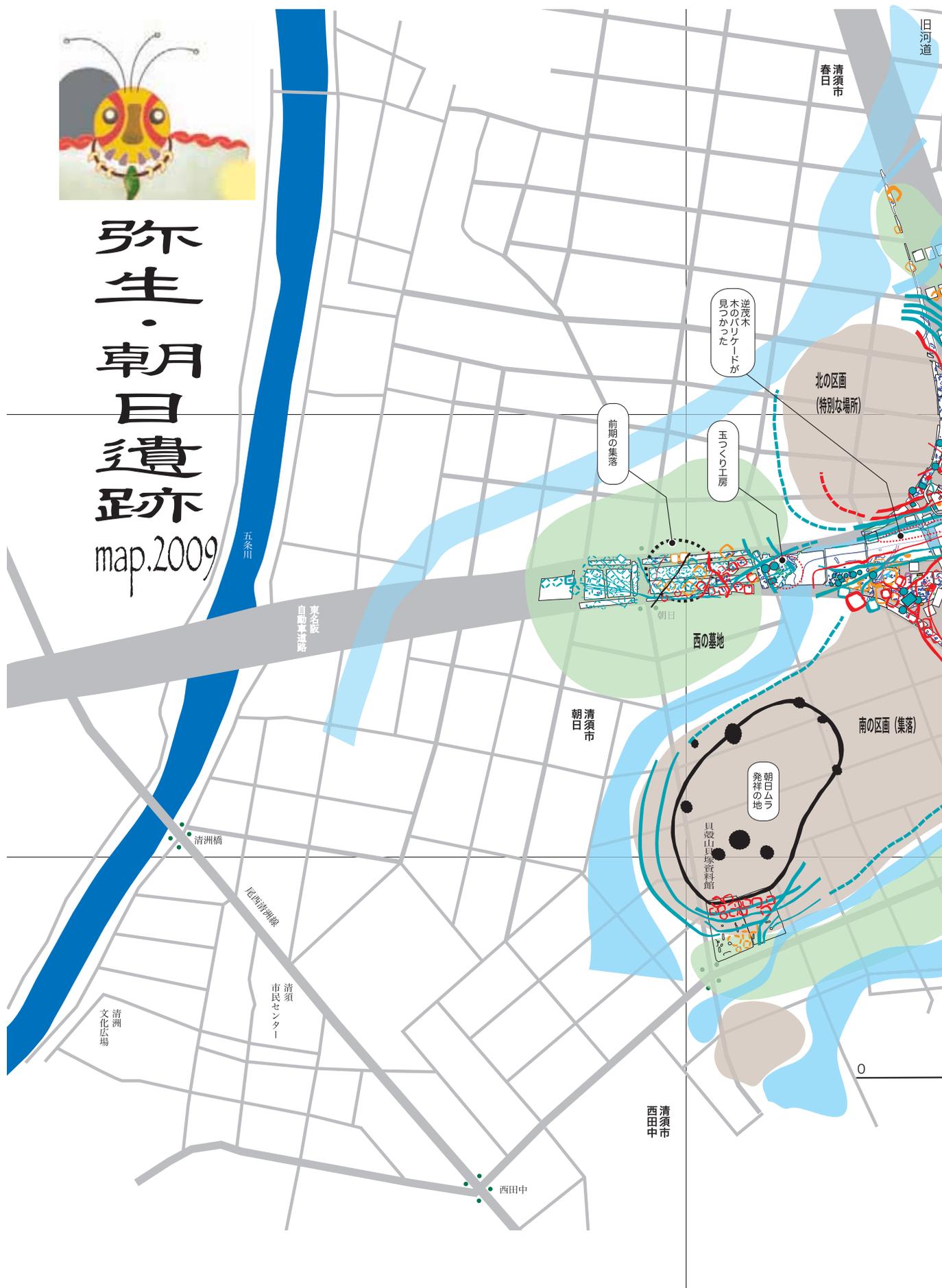
朝日遺跡は、濃尾平野の東部、標高3から4メートルほどの沖積地上に立地している。

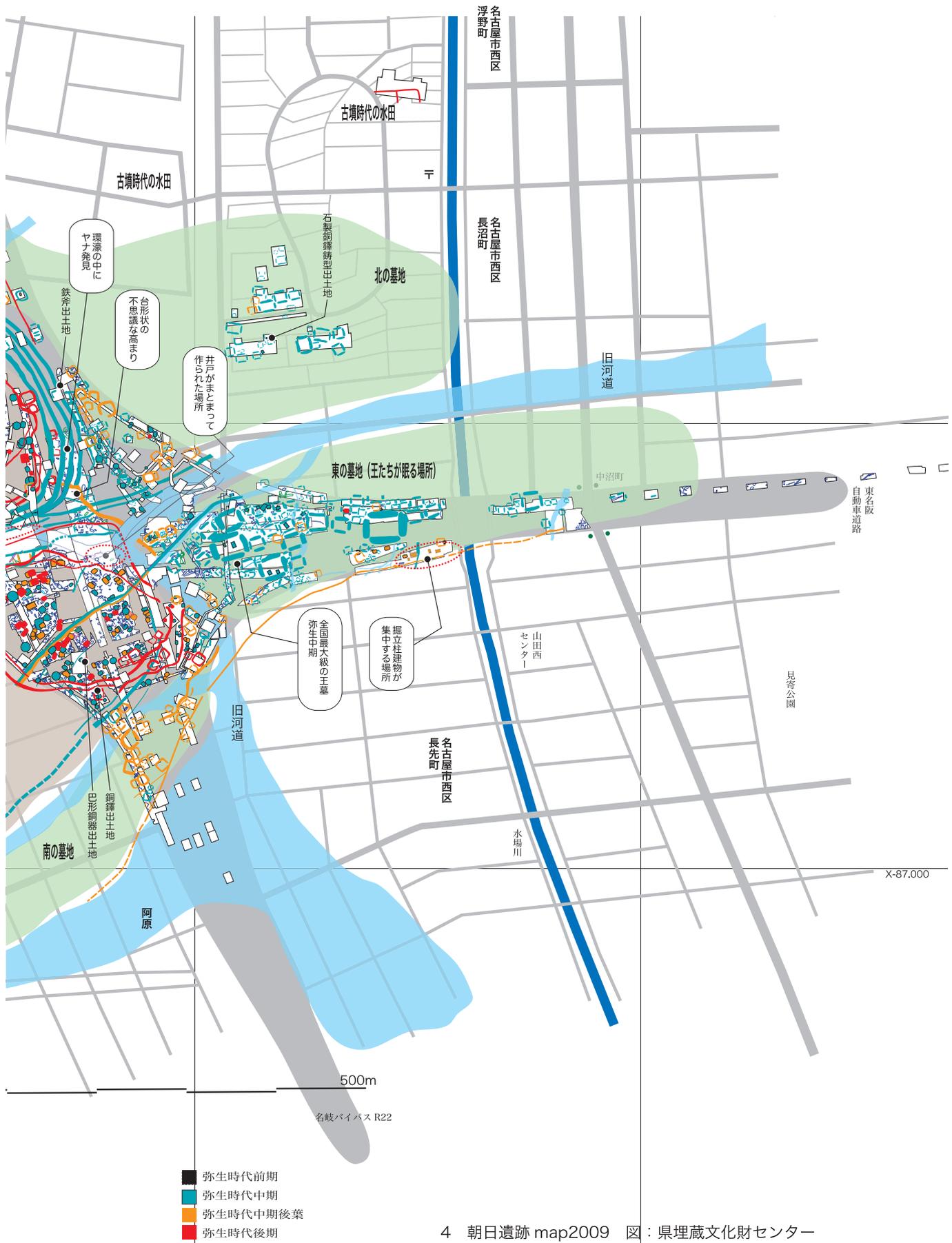
この地域は、名古屋市の西端にあたり、名岐バイパス（国道22号線）、名古屋高速道路、名古屋第2環状自動車道といった幹線道路が交わる交通の要所となっており、近年急速に市街化が進んでいる。



弥生・朝日遺跡

map.2009





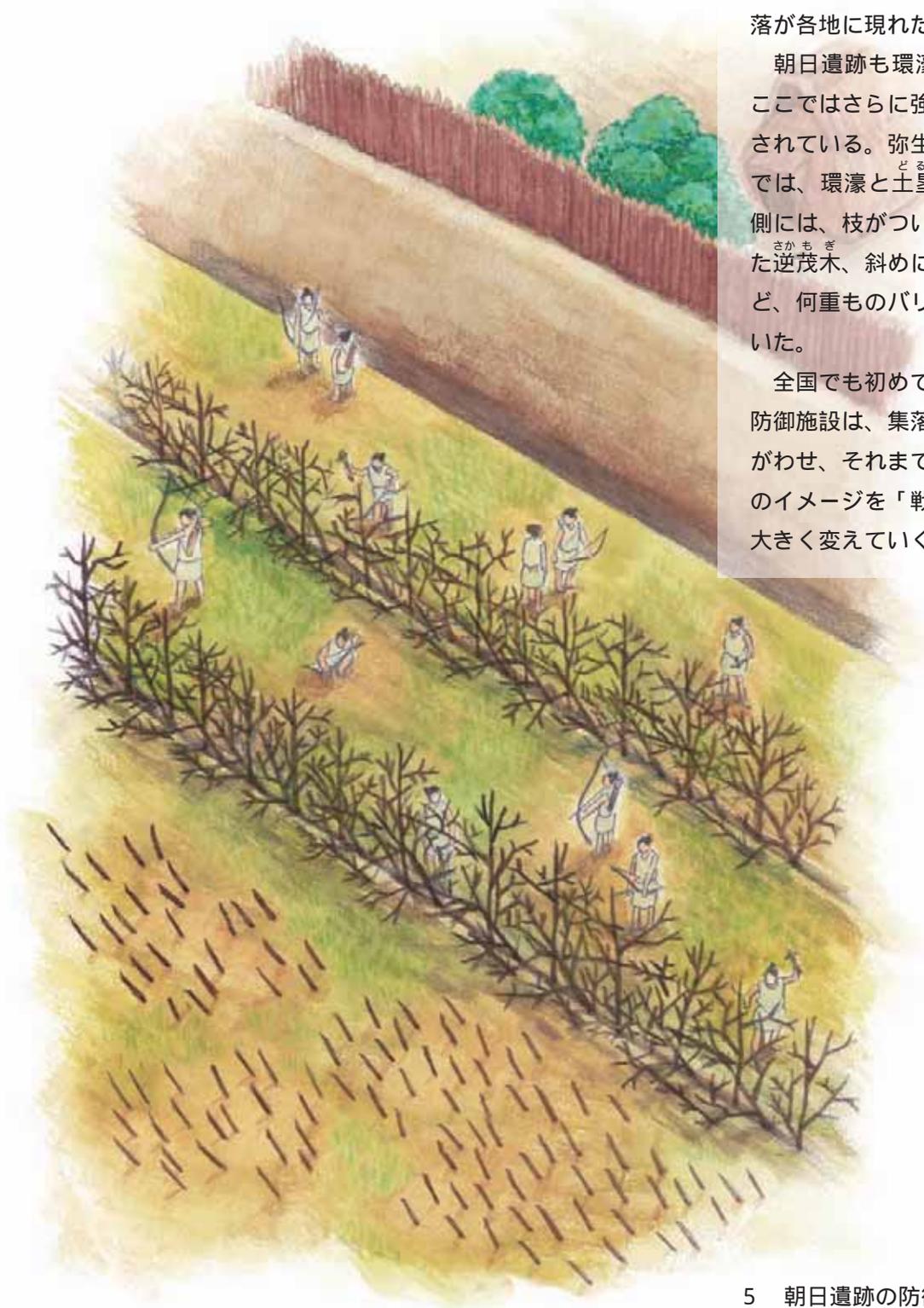
4 朝日遺跡 map2009 図：県埋蔵文化財センター

強固な防御施設

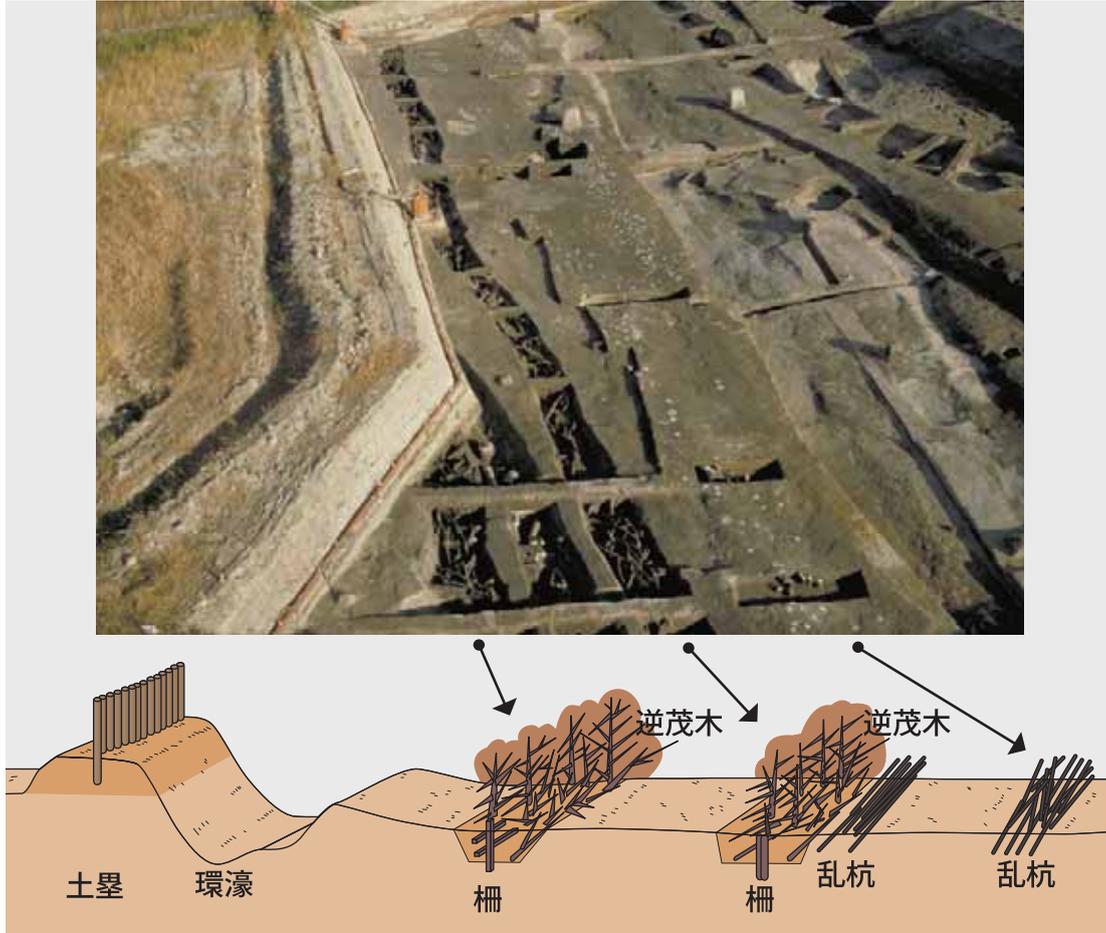
弥生時代は、集落間や地域をこえた争いが何度となく繰り返された時代でもあった。弥生文化の広がりとともに、戦いにそなえ堀をめぐらせた、環濠集落^{かんごう}が各地に現れた。

朝日遺跡も環濠集落のひとつだが、ここではさらに強固な防御施設が発見されている。弥生時代中期の北居住域では、環濠と土塁^{どるい}が築かれ、その外側には、枝がついたままの木をからめた逆茂木^{さかもぎ}、斜めに打ち込まれた乱杭など、何重ものバリケードがつくられていた。

全国でも初めて発見されたこれらの防御施設は、集落の城塞的な姿をうかがわせ、それまでの牧歌的な弥生時代のイメージを「戦乱の弥生時代」へと大きく変えていくことになった。



5 朝日遺跡の防御施設



6 防御施設遺構 写真：県埋蔵文化財センター
7 防御施設復元図 図：県埋蔵文化財センター



8 逆茂木 写真：県埋蔵文化財センター



9 乱杭 写真：県埋蔵文化財センター

防御施設の構造

集落外からの侵入を阻むため、環濠の外側に設けられたバリケード。溝の中から枝が付いたままの木が幾重にも重なって出土している。溝の中に杭を打ち込み、縦木、横木、斜めに枝のついたままの木（逆茂木）をからませ、溝を埋め戻して固定する構造だったと考えられている。逆茂木の外側には、斜めに打ち込まれた乱杭がめぐっていた。

大規模な貝塚



10 貝層断面 写真：県埋蔵文化財センター

朝日遺跡は濃尾平野では珍しく貝塚を伴う集落である。弥生時代前期には貝殻山貝塚を中心に貝塚が点在し、中期以降は遺跡の中央を走る谷に沿って連綿と貝層が形成された。ハマグリ・カキといった海に生息する貝が主体だが、シジミなど汽水域に生息する貝、オオタニシ・カワニナなど河川や池に生息する貝も出土している。



11 貝層断面 写真：県埋蔵文化財センター

住居



12 円形の竪穴住居 写真：県埋蔵文化財センター



13 方形の竪穴住居 写真：県埋蔵文化財センター

朝日遺跡では多数の竪穴住居跡がみついている。中期初めの集落では、平面が円形のものや方形のものがみられ、円形プランには大型の住居が含まれる。中期後葉以降は平面が方形の住居が主流になる。

写真の円形住居は、中央に大きな穴があり、両側に2つの小さな柱穴が設けられている。このような特徴をもった住居は、朝鮮半島から北部九州へ伝わり、その後東日本へと伝播したものである。

墓



14 方形周溝墓



15 土器棺 写真：県埋蔵文化財センター



16 土坑墓と人骨 写真：県埋蔵文化財センター

ほうけいしゅうこうぼ
方形周溝墓は、四方に溝を掘り土を盛った墓で、朝日遺跡では300基以上もみつがっている。居住域を取り囲むように、東西にそれぞれ大規模な墓域が造営された。注目されるのは、一辺が30メートルを超える巨大な方形周溝墓がいくつもみつがっていることで、これは弥生時代中期では全国でも最大級の規模である。

方形周溝墓の他には、土器を使用した土器棺墓、墓坑に直接埋葬する土坑墓などがある。

埋納された銅鐸



17 銅鐸の出土状態 写真：県埋蔵文化財センター

朝日銅鐸は、南居住域の南端、弥生後期の環濠と方形周溝墓とのわずか3メートルほどの間で発見された。長さ0.6メートルの楕円形の坑に、^{ひれ}鱗を上にした横向きの状態で納められていた。意図的に集落の南端に埋められたものとみられる。

銅鐸は弥生時代を代表する国産青銅器の一つで、農耕祭祀に用いられた祭器である。銅鐸の多くは、集落から離れた、山の中腹、谷の奥などで偶然発見されたものであるが、まれに朝日遺跡のように集落内に埋納された例が知られている。



18 銅鐸埋納位置 写真：県埋蔵文化財センター

弥生人のなりわい

縄文時代の終わり頃に北部九州にもたらされた水田稲作の技術は、弥生時代になって急速に広がっていった。朝日遺跡は、濃尾平野においていち早く米作りをはじめた集落の一つで、炭化米をはじめ、石庖丁、鋤と鍬、杵と臼といった農具も多く出土している。

また、稲作以外にも食に関わる様々な遺物がみついている。居住域の縁辺には多くの貝塚が残され、ハマグリ・カキ・シジミなどの貝類が食べられていた。貝層からはクロダイ・アジ・スズキ・サバなどの海水魚、コイ・フナ・ナマズなどの淡水魚の骨がみついている。銚・ヤス・釣り針・網の錘などの遺物もあることから、漁労の比重も高かったと考えられる。シカやイノシシなどの動物の骨は、狩猟も盛んに行われていたことをうかがわせる。

朝日遺跡の豊富な自然遺物は、弥生時代の人々が米以外にも様々な動植物を食物としていたことを示す貴重な資料となっている。



19 弥生時代の農作業 耕作



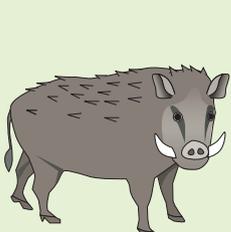
20 弥生時代の農作業 収穫



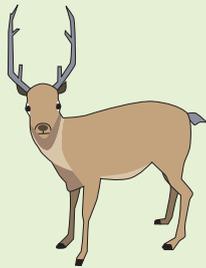
21 弥生時代の農作業 脱穀



22 イノシシ頭骨（上）、イヌ頭骨（下段左）、シカ頭骨・角（下段右）



イノシシ



シカ



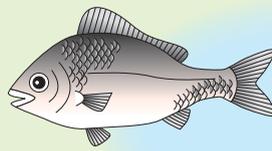
23 炭化米 写真：県埋蔵文化財センター



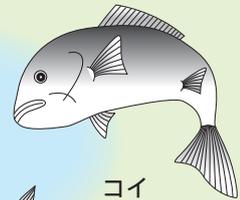
イネ



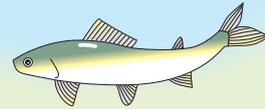
24 ハマグリ（上段左）、シジミ（上段右）、カキ（下段）



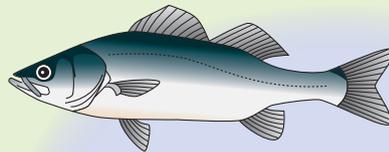
フナ



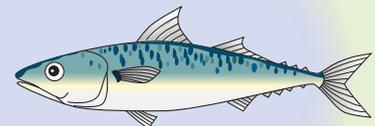
コイ



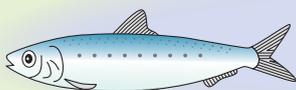
アユ



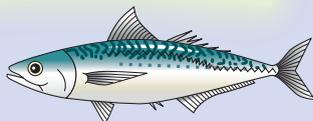
スズキ



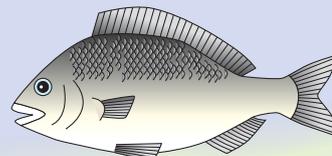
サバ



イワシ



アジ



クロダイ



25 ヤナ状遺構 写真：県埋蔵文化財センター

弥生時代後期には、中期まで環濠として使われていた溝のなかに、魚を捕獲するヤナとみられる施設が設けられていた。上流に作られた木組みで水流を調節し、下流に作られた簀との間に追い込んだ魚を捕獲する仕組みになっていたようだ。

朝日遺跡で最も多く出土している魚類はコイ、フナ、ナマズなどの淡水魚である。自然の河川だけでなく、集落に近い人工的な水路においても漁労活動が行われていたことがうかがえる貴重な発見である。



26 ヤナの推定復元

東海弥生文化の至宝

木製品 ~ 弥生の匠

骨角牙貝製品 ~ 精緻な芸術品

金属製品・ガラス製品 ~ 古代のハイテク

石器・石製品 ~ 石の工芸品

土器・土製品 ~ 弥生の造形



木製農具



27 木製農具 豎杵（上段） 鋤（左） 鍬先・柄（右） 田下駄（中央上） 豎杵長さ161.8cm 重要文化財



28 木製鋤の出土状況
写真：県埋蔵文化財センター

弥生時代は、水稲農耕の定着とともに、様々な木の農具が普及していった時代である。これらの農具は、一昔前の民具とほとんど変わらないものもある。

鍬や鋤は田畑を耕したり水路を作ったりするために、田下駄はぬかるんだ水田での作業に、臼と杵は収穫した物の脱穀作業にと用いられた。

木製容器



29 木製容器（槽・高杯・鉢）と杓子 左長さ66.7cm

重要文化財

東海弥生文化の至宝

木製品
↳ 弥生の匠

朝日遺跡では様々な木製容器が出土している。

食器類では、高杯^{たかつき}、鉢、椀、皿などがある。これらの材には、クスノキやケヤキなど比較的やわらかく加工のしやすい樹種が用いられた。赤や黒の色が塗られたもの、文様などの装飾が施されたものもある。大型の容器では、槽^{そう}、把手付槽^{とって}などがある。また、さじや杓子^{しゃくし}などの食膳具も使われていた。



装飾鉢

口縁外面に文様が彫刻されている。表面にはわずかに赤彩の痕跡が残っていた。

30 装飾鉢 高さ8.2cm 写真：県埋蔵文化財センター
重要文化財



31 把手付槽 長さ24.5cm 写真：県埋蔵文化財センター 重要文化財



32 台付槽 長さ66.7cm 写真：県埋蔵文化財センター 重要文化財
底面側・台部拡大

武器形木製品



33 武器形木製品 剣・戈・鏃など 左45.8cm

重要文化財

東海弥生文化の至宝

木製品
↳ 弥生の匠

弥生時代になって戦争が始まると、それに伴い各種の武器も発達する。また、武器を模した祭具も出現し、武器が力や権力の象徴としてあがめられていった。朝日遺跡では、けん か やじり 剣、戈、鏃などを模した武器形木製品がみられる。



34 儀仗 長さ58.7cm 写真：県埋蔵文化財センター

重要文化財

鳥形・舟形・木偶



35 鳥形木製品 上長さ40.3cm

重要文化財

鳥形木製品

鳥は銅鐸にもしばしば描かれ、穀霊を運ぶ神の使いとして信仰されていた。鳥形木製品は、農耕儀礼に用いられたものだと考えられている。



36 舟形木製品 左現存長31.3cm

重要文化財

舟形木製品

木をくり抜き、舟を模した木製品。

木偶

下端の形状から何かにさしていた。顔面には、目と口が表現されている。

37 木偶 長さ12.4cm

写真：県埋蔵文化財センター

重要文化財



骨角製狩猟具・漁労具



38 鹿角製固定銚 左長さ26.5cm

重要文化財

固定銚^{もり}

鹿角から切り取った板状の素材を加工し、側縁に逆刺^{かえし}を作り出している。



39 柄に装着された固定銚 長さ26.5cm

重要文化財

柄に装着された固定銚^{もり}

銚の基部を木製の柄に差し込み、結合部は樹皮を巻いて固定している。銚の使用方法を知る貴重な出土例である。

東海弥生文化の至宝

木製品
↳ 弥生の匠 / 骨角牙貝製品
↳ 精緻な芸術品

骨角製品は、動物の骨、角、牙などを用いて作られた道具である。朝日遺跡の骨角製品は、質・量ともに優れており、弥生時代を代表する資料となっている。とりわけ、狩猟や漁労に使われたものが多く、固定銚、ヤス、釣り針、骨鏃など多彩な遺物は、この時代の狩猟、漁労の技術を伝える貴重な資料である。



40 骨鏃 左長さ7.2cm

重要文化財

こつぞく
骨鏃

鹿角や骨を素材とする。形態は多様で、石鏃や銅鏃の形を模倣したとみられるものもある。



41 ヤス 右長さ17.8cm

重要文化財

ヤス

シカの中手骨、中足骨を縦に分割・切断し、長く細身の形態を作り出している。



42 釣り針 左長さ7.9cm

重要文化財

釣り針

左は鹿角を加工したもの。右はイノシシの牙を素材として製作されたものである。

骨角牙製装身具



髪飾り、^{すいしよく}垂飾の他、貝輪など多彩な装飾品が出土している。

髪飾りはシカの中手骨、中足骨を用いて、縦に細長く分割した素材を加工する技術は漁労具のヤスと共通している。頭部に細かな彫刻を施したものが多い。

垂飾では、基部に穿孔または溝を刻んだ棒状鹿角製品と呼ばれる装身具が複数出土している。基部に指かけとみられる凹みを施したものの、中程に浮線文様の装飾が彫られたものがある。この他にも1孔または複数の孔を施した牙製装身具類、管状骨を輪切りにして管玉の様な形に成形した鳥骨製装身具類、サメなどの脊椎骨を加工した装身具などが出土している。

43 装身具 牙製装身具類（左列）棒状鹿角製品（右3点）
右現存長17.0cm 写真：県埋蔵文化財センター

重要文化財



44 髪飾り 左長さ20.5cm 写真：県埋蔵文化財センター 重要文化財



45 棒状鹿角製品 現存長19.9cm 写真：県埋蔵文化財センター 重要文化財



46 軟骨魚類椎骨製垂飾 径1.2～1.4cm
写真：県埋蔵文化財センター 重要文化財



47 鳥管状骨製垂飾 右長さ1.5cm
写真：県埋蔵文化財センター 重要文化財

骨角製品の装飾



48 装身具に施された彫刻

重要文化財

東海弥生文化の至宝

骨角牙貝製品
↳ 精緻な芸術品



49 弭形鹿角製品 長さ10.2cm 写真：県埋蔵文化財センター

重要文化財



弭形鹿角製品

弭ゆはすは弓の両端の弦をかける部分のこと。鹿角の先端部を加工して作られており、下端はソケット状になっている。中程に横位の直線文を彫刻し、5段の孔を開け、鹿角で作られた栓がはめ込まれている。

紡錘車と縫い針



50 紡錘車と縫い針

紡錘車復元品（上段） 土製紡錘車（中段左3点） 鹿角製紡錘車（中段右） 骨製縫い針（下段）
右鹿角製紡錘車径4.2cm 写真：県埋蔵文化財センター 重要文化財

弥生時代には機織りの技術が日本列島にもたらされた。有機質の繊維で織られた布は、遺物としては残りにくい。しばしば土器の底部などにその痕跡をとどめている。

紡錘車は糸をつむぐための道具である。主に土で作られているが、朝日遺跡では他にも石製、鹿角製のものが出土している。鹿角製紡錘車は、角の根元の角座という部分を円盤状に整形し、中央に孔が開けて製作している。縫い針は非常に細く、頭部にとっても小さな孔が開けられている。



51 縫い針 左長さ3.9cm

写真：県埋蔵文化財センター
重要文化財



52 土器底部の布目圧痕

祭祀具



53 ト骨 現存長17.8cm
写真：県埋蔵文化財センター
重要文化財

ぼっこつ
ト骨

火のついた棒で骨の表面を焼き、焦げたあとで吉凶などを占った。弥生時代になって、農耕とともに大陸からもたらされた風習である。朝日遺跡では、シカやイノシシの^{けんこうこつ}肩胛骨を用いたト骨が出土している。



54 加工されたイノシシの下顎骨 長さ23.3cm 写真：県埋蔵文化財センター 重要文化財

加工されたイノシシの^{かがくこつ}下顎骨

イノシシの下顎骨に円形の孔があげられている。岡山県南方遺跡では、同様な加工骨が列をなして出土した事例がある。おそらく棒などにとおしてつるし、儀礼・祭祀に用いられたものであろう。

東海弥生文化の至宝

骨角牙貝製品
↳ 精緻な芸術品

銅 鐸



55 朝日銅鐸 高さ46.3cm 写真：県埋蔵文化財センター

重要文化財



A面



側面



B面

56 銅鐸各部 : 県埋蔵文化財センター

とっせんちゆう
突線紐1式銅鐸。器高46.3cm、幅26.3cmをはかり、文様は四区の袈裟禪文と鋸齒文、同心円文からなる。弥生時代中期末から後期初頭に製作されたと考えられ、後に東海地域で盛行する三遠式銅鐸の前身となる特徴をもっている。



内面



57 銅鐸飾耳 右現存長7.1cm

重要文化財



紐部拡大

銅鐸飾耳

朝日銅鐸とは別地点で出土した。近畿式銅鐸の飾耳部分の破片である。

東海弥生文化の至宝

金属製品・ガラス製品
〜古代のハイテク

青銅製品



58 筒形銅製品 長さ6.8cm

重要文化財

筒形銅製品

円形の平坦面をもつ筒形の青銅器。先端に孔が穿たれていることから、垂飾として使用されたとみられる。



ともえがたどうき 巴形銅器

弥生時代後期から古墳時代前期にかけて作られた青銅製金具。スিজガイという貝を模したとされ、魔除けや敵の攻撃を避ける意味があったと考えられている。弥生時代では主に九州地方に分布し、東日本では希少な遺物である。



59 巴形銅器 径5.6cm : 県埋蔵文化財センター
重要文化財



60 銅鏡 右下長さ4.4cm

重要文化財

銅鏡

有茎式の銅鏡で、身の形態は多様である。



61 破鏡 現存長4.6cm 写真：県埋蔵文化財センター
重要文化財

破鏡

現存長4.6cm 虺龍文鏡。復元径は7.4cm、外区を中心とした破鏡である。破断面はよく研磨され、2つの紐孔が穿たれており、垂飾として利用されてものである。

銅鏡

S字状文小型仿製鏡。古墳時代前期の竪穴住居に近接する包含層から出土した。



62 銅鏡 径7.1cm

重要文化財

鉄 斧



63 袋状鉄斧 長さ8.3cm 写真：県埋蔵文化財センター

重要文化財

袋状鉄斧

長さ8.3cm 北居住域をめぐる環濠の最下層から出土した鍛造の有肩袋状鉄斧である。袋部は、薄く伸ばした鉄板を内型(柄張り)に巻き、鍛打して身に巻き付け成形するという高度な技術が用いられている。



袋部

金属器の製作



64 鋳型状の土製品 上現存長18.0cm 写真：県埋蔵文化財センター

どうき
銅滴

溶かした銅を鋳型に流し込む際に、こぼれ落ちた滴が固まったもの。切断面は金属光沢を有する。



65 銅滴 現存長1.9cm 写真：県埋蔵文化財センター



66 青銅器の鋳造風景 イラスト：県埋蔵文化財センター

ガラス小玉



67 ガラス小玉の首飾り（復元）

重要文化財

朝日遺跡では約300点のガラス小玉が出土している。そのほとんどは方形周溝墓から出土しており、副葬品として供えられたものであろう。ガラス玉の大きさは径2～5mm・厚さ2～5mm、色調は水色が主体で、他に藍色のものもみられる。



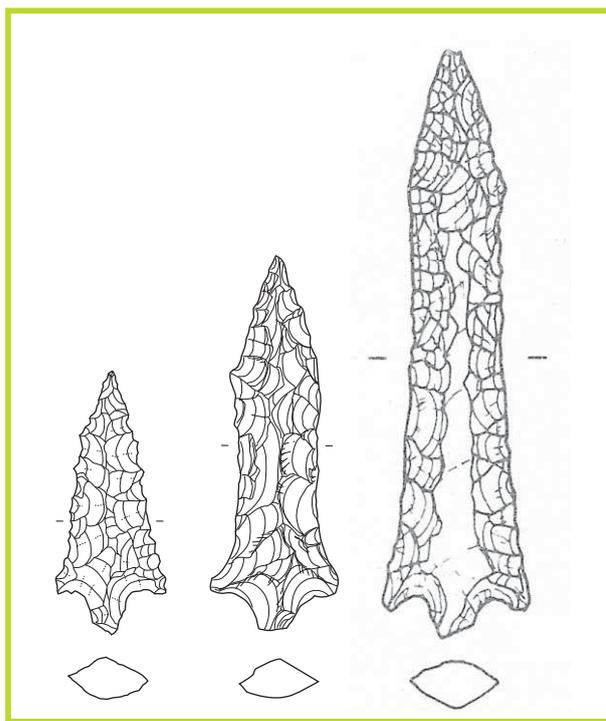
68 ガラス小玉 左下径0.2～0.4cm 写真：県埋蔵文化財センター

石 鏃



69 打製石鏃 左上長さ6.1cm
 上段：サヌカイト、中段：チャート、下段：下呂石

重要文化財



70 朝日型長身鏃 原寸大

先端に段をもち身の平面が五角形を呈する有茎の打製石鏃は、東海地方の典型的な石鏃の形である。長さが3 cmを超える長大なものは、朝日遺跡の名を冠し、「朝日型長身鏃」と呼ばれている。石材は、下呂石、チャートの他、近畿地方のサヌカイトも用いられている。

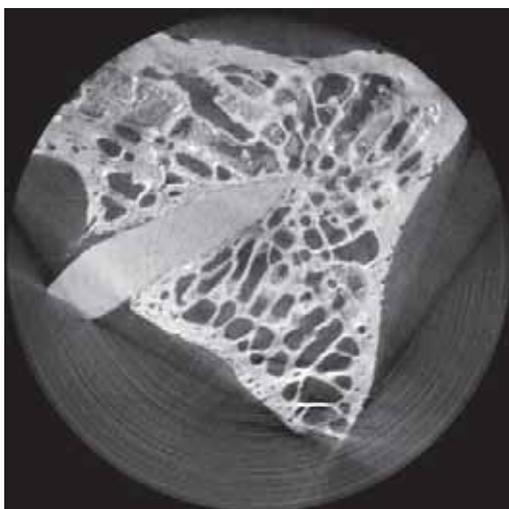
東海弥生文化の至宝

金属製品・ガラス製品
 〳 古代のハイテクノ石器・石製品
 〳 石の工芸品

シカの骨に刺さった石鏃



71 石鏃の刺さったシカ腰椎骨 写真：奈良文化財研究所 重要文化財



72 X線CTスキャン画像
写真：奈良文化財研究所

弥生時代中期の貝層から、石鏃が刺さったニホンジカの第6腰椎骨が出土した。X線CT装置で撮影・計測したところ、石鏃は現存長18.5mm、幅11.5mmの小型の石鏃であること、矢はシカの右斜め前方からほぼ水平に打ち込まれたものであることがわかった。また、石鏃は脊髄までは達しておらず、石鏃を覆うように骨増殖が進んでいることから、この矢傷は致命傷とはならず、シカはしばらくの間生きながらえることができたようだ。弥生時代の狩猟技術を知ることができる、極めて希少な出土資料である。

石の武器



73 打製石剣（左2点） 磨製石剣（右） 右長さ16.2cm

重要文化財

東海弥生文化の至宝

石器・石製品
↳ 石の工芸品



74 打製石剣 写真：県埋蔵文化財センター

石剣は弥生時代の石の武器で、打製のものと磨製のものが出土している。左2点は近畿の二上山から産出したサヌカイトを用いて作られた打製石剣である。精緻な剥離調整が施された完成度の高い優良品である。近畿地方で製作されたものが、交易品として持ち込まれたものであろう。

収穫具



75 粗製剥片石器（上2段）、大型磨製石庖丁（下段） 右下長さ15.8cm

重要文化財



76 磨製石庖丁 長さ15.2cm

重要文化財

弥生時代になり本格的な農耕が開始されると、様々な農具が出現する。教科書でもおなじみの石庖丁は、稲の穂を刈り取る穂摘み具であるが、朝日遺跡をはじめとする伊勢湾地域では出土する数が少ない。かわりに、粗製剥片石器と呼ばれる礫を打ち割っただけの簡易な石器がたくさんみついている。この石器の刃の縁辺には、イネ科植物を切断することで形成される特徴的な光沢がみられることから、鎌のように稲の刈り取りや除草に用いられた農具だと考えられている。

磨製石斧



77 磨製石斧 両刃石斧（上段）、扁平片刃石斧（下段左）、柱状片刃石斧（下段右） 右上長さ20.6cm

重要文化財

東海弥生文化の至宝

石器・石製品
↳ 石の工芸品



78 磨製石斧の未製品
写真：県埋蔵文化財センター

鉄器が普及するまでの間、木の伐採・加工に用いられた道具の主役は石斧であった。弥生時代の石斧は、太身の両刃石斧^{りょうばせきふ}、薄身の扁平片刃石斧^{へんぺいかたばせきふ}、ノミのような形をした柱状片刃石斧^{ちゅうじょうかたばせきふ}などで、これらは起源を中国・朝鮮半島にもつことから大陸系磨製石器と呼ばれている。

朝日遺跡の磨製石斧は、ハイアロクラスタイトという緑色の岩石が用いられている。塩基性岩の一種で、比重が高く粘りがあり、強い衝撃を受ける石斧に適した石材といえる。鈴鹿山脈に産出することが知られており、三重県いなべ市では、ハイアロクラスタイト製石斧の生産地がみついている。ここで製作された石斧や未製品が濃尾平野にも流通していたようである。



79 伐採用斧・斧柄（未製品） 左長さ20.6cm

重要文化財



80 加工用斧・斧柄 左上長さ9.3cm

重要文化財

勾玉・管玉



81 勾玉・管玉の首飾り（復元） 下勾玉長さ3.8cm

重要文化財

東海弥生文化の至宝

石器・石製品
↳ 石の工芸品



82 ヒスイ製勾玉の未製品 長さ1.5cm
写真：県埋蔵文化財センター

重要文化財

朝日遺跡では、弥生時代中期の玉作りの工房跡が複数みついている。工房跡からは、ヒスイ、メノウ、緑色凝灰岩といった玉の原石、製作途中の未製品や残材、また、玉作りに用いた石鋸、石針、砥石などの工具類が出土しており、まがたま くだたま 勾玉、管玉などの一連の製作工程をうかがうことができる。

工房は集落の限られたエリアに配置され、他地域産の石材や高度な技術が用いられていることから、専門の工人集団が集落内に居住していたのではないかとみられている。

玉作り関連資料



玉錐



研磨



施溝具



穿孔



玉原石



施溝・分割



玉砥石



整形



クサビ

83 玉作り工具と管玉の製作工程

写真：県埋蔵文化財センター

重要文化財（玉作り工具）

84 玉作りの作業風景

イラスト：県埋蔵文化財センター



弥生時代前期の土器



85 遠賀川系土器 左高さ23.6cm

重要文化財



86 条痕文系土器 甕 高さ32.2cm

重要文化財

貝殻山貝塚の周辺に人々の営みが始まる。この時期の土器は、西日本の影響を強く受けた遠賀川系土器が主体で、稲作や環濠集落といった大陸起源の文化が本格的にこの地にもたらされたことを象徴している。一方、縄文時代からの系譜を引く条痕文系土器も共存し、西の文化と東の文化が接触する当地ならではの多様な構成となっている。

東海弥生文化の至宝

石器・石製品
↳ 石の工芸品 / 土器・土製品
↳ 弥生の造形

弥生時代中期の土器



87 中期前葉から中葉の土器 中段右高さ28.2cm

重要文化財



88 細頸壺 高さ27.5cm

写真：県埋蔵文化財センター

重要文化財

朝日遺跡が最も拡大・盛行した時期で、集落の基本的なレイアウトが確立する。谷をはさんで北区画と南区画が成立し、居住域の東西には大規模な墓域が造営された。

この時期は西日本の影響を受けつつも、地域色の強い土器が成立する。櫛描文系くしがきもんの土器、条痕文系の土器など、多様な系譜の土器で構成される。壺の頸部や体部には、櫛描文とともに、貝殻を用いた直線文などの文様も施されている。



89 中期末の土器 右下高さ17.5cm

重要文化財

東海弥生文化の至宝

土器・土製品
↳ 弥生の造形



90 凹線文系細頸壺 左上高さ26.5cm

重要文化財

中期末になると、環濠が埋められ、居住域・墓域も分散するなど、それまでの集落景観が大きく変貌した。

この時期には、西日本の^{おうせんもん}凹線文系土器の影響を受けた土器群が成立する。この土器は、壺や高杯の口縁に数条の凹線をめぐらすことを特徴とする。一方、この地域の特徴的な土器として、甕の底部に脚台を付けた台付甕が出現し、伝統的な甕の形態として古墳時代前期まで引き継がれていく。

弥生時代後期の土器



91 後期の土器 右上28.2cm

重要文化財

再び環濠が掘削され、谷の南北に区画が形成される。朝日遺跡の最後の集落景観である。

壺や甕は全体に丸みをおびたプロポーションになり、皿状の杯部をもつ高杯、プランデーグラス状の椀形高杯など、高杯類のバリエーションが増え、比率も高くなる。赤彩を多用した装飾技法は、この地域の大きな特色となっている（50頁参照）。

弥生時代終末期から古墳時代前期の土器



92 終末期から古墳時代前期の土器 右上高さ33.5cm

重要文化財

東海弥生文化の至宝

土器・土製品
↳ 弥生の造形



93 脚台付瓢形壺 ひさご 高さ15.3cm

重要文化財

集落を廻る環濠が埋められ、住居も希薄になるなど、多くの人々が集住した朝日遺跡の集落景観は失われ、急速に衰退していったとみられる。

土器は、弥生時代後期の構成を引き継ぐ一方で小・中型土器を中心に新たな器種が加わる。S字状口縁台付甕（53頁参照）など、新しい時代を象徴する土器も誕生する。壺の口縁、高杯の口縁や脚部などは、内側に湾曲する形態のものが多く、この時期の特徴的なプローションである。

沈線文系土器



94 沈線文系土器 高さ25.6cm

重要文化財

頸部がすぼまり、口縁が大きく開く壺形土器で、口縁部と体部には縄文文化の伝統を引く深い沈線文が刻まれている。

この種の土器は、岩倉市大地遺跡出土の資料（県指定文化財）を標式とし、^{だいち}大地式土器と呼ばれてきた。尾張地域を中心に飛驒、北陸地方にも認められ、西の弥生文化と東日本の在来文化との接触によって生じた折衷的な形態の土器である。

円窓付土器



95 円窓付土器 左高さ32.6cm

重要文化財

東海弥生文化の至宝

土器・土製品
↳ 弥生の造形



96 台付円窓付土器 高さ29.2cm

重要文化財

まるまどつき
円窓付土器は、体部上位に大きな楕円形の孔をもつ壺形土器である。口縁や頸部に刺突文や数条の沈線をめぐらせるものもあるが、全般的に装飾的な文様は少ない。尾張地域を中心に分布しているが、その大半は朝日遺跡で出土したものである。弥生時代中期後葉の墓域とその周辺から出土することが多く、居住域で見つかることは少ない。

また、焼成後に穿孔されるものがあること、屋外に放置され風雨にさらされていたことを示す「風化痕」がみられるなど、墓に供えられていた土器と共通する特徴が認められ、墓域での祭祀に用いられた土器と考えられている。

赤く塗られた土器



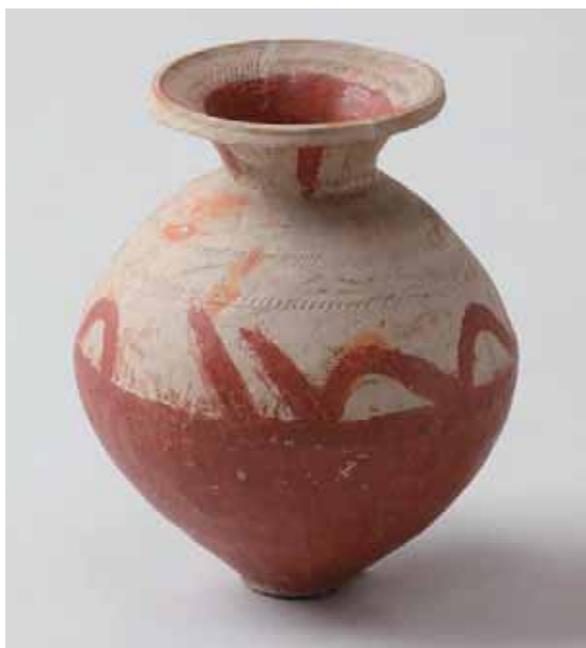
97 赤彩土器 左上高さ30.5cm

重要文化財

弥生時代後期の尾張地域を特徴付ける赤彩土器は、ギリシャのクレタ島クノッソス宮殿跡出土の宮廷式きゆうていしきになぞらえて「パレス・スタイル土器」とも呼ばれている。器肌は白色を呈し、直線文・波線文・斜行線文・列点文などを組み合わせた文様帯と赤色顔料を塗布した赤彩帯で装飾される。弥生時代後期は最も装飾が華やかな時期で、広口壺の他、小型壺、高杯、プランデーグラス形の高杯、器台など多くの器種がみられる。終末期以降は、赤彩は壺のみに施されるようになり、古墳時代前期まで製作された。



98 赤彩土器の文様



99 赤彩壺（弥生後期） 高さ27.7cm
重要文化財



100 赤彩壺（弥生後期） 高さ30.5cm
重要文化財



101 赤彩壺（古墳前期） 高さ26.1cm
重要文化財

東海弥生文化の至宝

土器・土製品
↳ 弥生の造形



102 赤彩合子 身・蓋 高さ6.4cm 写真：県埋蔵文化財センター

重要文化財

赤彩合子

弥生時代後期初頭の方形周溝墓から出土した。底部には透かしが施された高台が付き、身は筒形を呈する。蓋の外面には鋸歯状文きょしじょうもんが描かれている。身と蓋それぞれに二孔一対の紐孔が穿たれている。

同形の土器は、本県豊田市の川原遺跡から出土しているが、類例は極めて少ない。

ガラス小玉

赤彩壺の口縁内面に水色のガラス小玉が埋め込まれていた。小玉は半分に割れている。近接して同じような凹みがあり、本来は二つに割れたガラス玉が対になっていたようだ。ガラス玉は、土器を整形し文様を施した後、まだ粘土が固まる前に埋められている。



103 赤彩壺の口縁に埋め込まれたガラス小玉 写真：県埋蔵文化財センター

重要文化財

S字状口縁台付甕



104 S字状口縁台付甕 左高さ21.1cm

重要文化財

東海弥生文化の至宝

土器・土製品
↳ 弥生の造形



105 口縁部拡大

えすじ じょうこうえんだいつきがめ
S字状口縁台付甕（S字甕）は、弥生時代末から古墳時代初めに伊勢湾沿岸地域で盛行した特徴的な形態の台付甕である。屈曲する口縁の断面形が「S」字状を呈することが名前の由来である。体部の器壁が非常に薄く、最も薄いところでは数ミリしかない。外面には荒いハケメが施されている。

弥生時代終末期には、吉備、畿内、北陸などの各地に個性的な薄甕が誕生するが、S字甕もその一つである。古墳時代初頭になると、S字甕は九州から東北にいたる広い範囲に分布を広げ、特に関東地方をはじめとする東日本に強い影響を与えた。このことから、伊勢湾地域の文化が東日本の古墳時代の開始に大きな役割を担っていたのではないかと考えられている。

台盤状土製品



106 台盤状土製品と甕 右上高さ6.9cm

重要文化財



107 被熱により赤化した断面 径8.8cm

だいばんじょうどせいひん
台盤状土製品は、弥生時代中期に用いられた土製品である。上面は円形の平坦な面となっており、円柱状のもの、下面がくぼむもの、脚台形のものがある。強い火を受けているのが特徴で、表面から内部にかけて赤く変色したものが多い。土器を火にかける際に、土器をのせる支脚として用いられたものである。

鳥形土製品



108 鳥形土製品 左高さ11.6cm

重要文化財

東海弥生文化の至宝

土器・土製品
↳ 弥生の造形



109 鳥形土器 現存高さ17.0cm

重要文化財

鳥に似せて作られた容器で、尾から胴までが作られ、首の部分が土器の口になっている。弥生時代中期末から後期の作で、小型のものが多い。

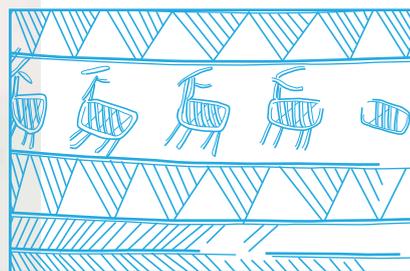
鳥形土器

左の土器は、壺の口縁部分が鳥形に作られ、壺の頸から下は欠損している。背中部分には突帯と刻みが施されている。やや古く弥生時代中期末に作られたものである。

描かれたシカ



シカ絵画部分拡大



110 シカが描かれた筒形土製品 高さ15.8cm 写真：県埋蔵文化財センター

重要文化財



111 シカ絵画土器片 現存長3.5cm

重要文化財

シカは弥生時代の画題としてたびたび登場する。写真110は筒形土製品で、横位に配された鋸歯状文・斜行線文の文様帯の間に頭部を左に向けて連続するシカの絵が描かれている。

この他にもシカを描いた土器が複数確認されているが、その多くは壺の体部に描かれたものである。

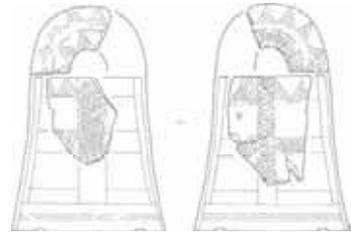
銅鐸形土製品



112 銅鐸形土製品 右下現存長6.2cm

重要文化財

青銅製の祭器である銅鐸を模して作られた土製品である。形態・文様を正確に写しとったものがある一方、非常に粗雑な作りのものもみられる。



113 銅鐸形土製品 右下高さ3.5cm

重要文化財

東海弥生文化の至宝

土器・土製品
↳ 弥生の造形

顔の造形

弥生時代に人の顔を描いた資料はそれほど多くはない。朝日遺跡では、人面様の櫛描文が描かれた土製品、器面に人面または顔の一部を線刻した土器などが出土している。これらの顔には瞳の表現がなく、あるいは邪視文^{じゃしもん}のように、邪気や敵を退ける呪術的な意味合いがあったのかもしれない。

下段の土器には、人の耳のような突起がつけられている。目や鼻は表現されていないが、土器の口縁部を人の顔に見立てた造形であろう。



114 人面が表現された土製品（蓋） 径4.3cm
写真：県埋蔵文化財センター 重要文化財



115 人面の一部が表現された土器片 写真：県埋蔵文化財センター



116 耳がつけられた壺の口縁 現存高さ18.8cm 写真：県埋蔵文化財センター 重要文化財

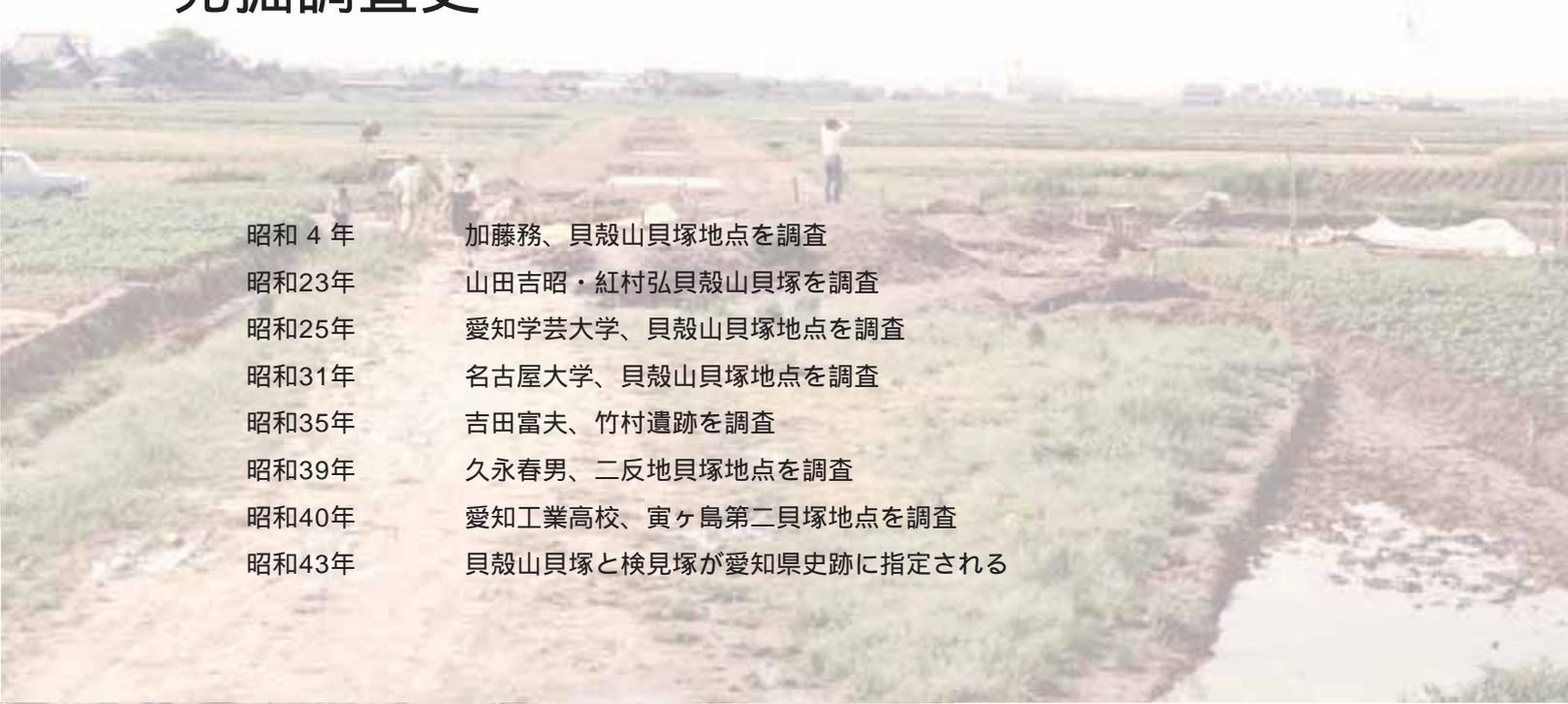
発掘調査のあゆみ

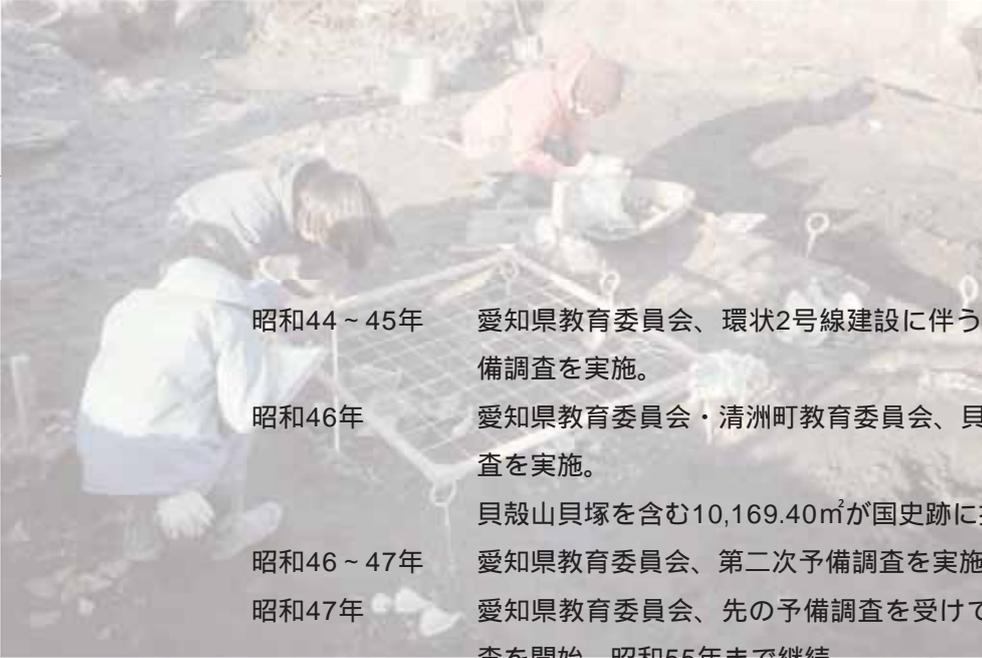
発掘調査史

発掘調査報告書



発掘調査史

- 
- 昭和4年 加藤務、貝殻山貝塚地点を調査
 - 昭和23年 山田吉昭・紅村弘貝殻山貝塚を調査
 - 昭和25年 愛知学芸大学、貝殻山貝塚地点を調査
 - 昭和31年 名古屋大学、貝殻山貝塚地点を調査
 - 昭和35年 吉田富夫、竹村遺跡を調査
 - 昭和39年 久永春男、二反地貝塚地点を調査
 - 昭和40年 愛知工業高校、寅ヶ島第二貝塚地点を調査
 - 昭和43年 貝殻山貝塚と検見塚が愛知県史跡に指定される



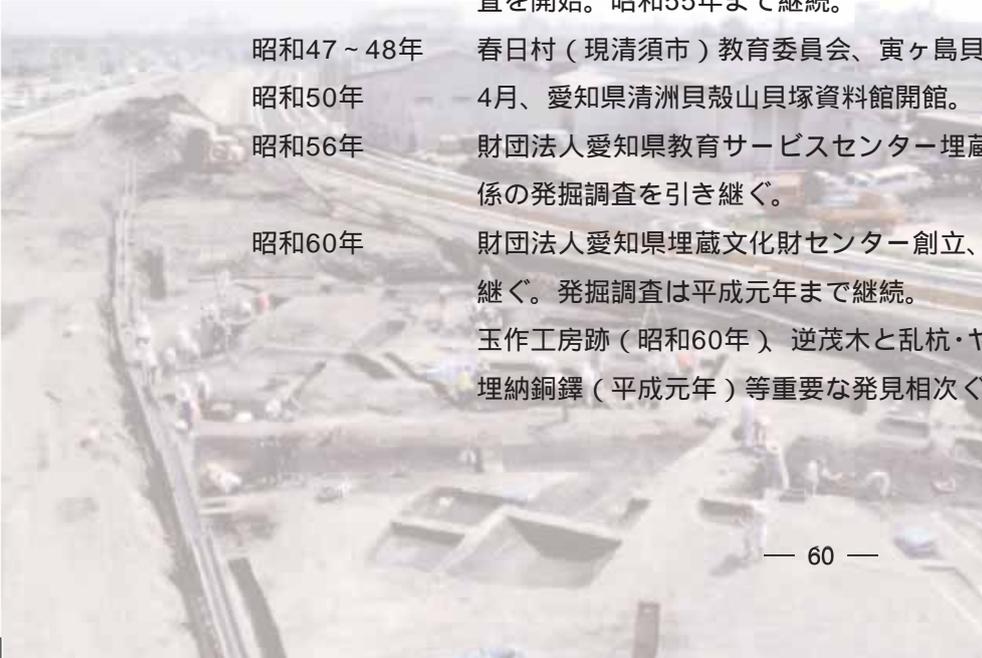
昭和44～45年 愛知県教育委員会、環状2号線建設に伴う遺跡範囲確認のために朝日貝塚予備調査を実施。

昭和46年 愛知県教育委員会・清洲町教育委員会、貝殻山貝塚地点を中心に範囲確認調査を実施。

貝殻山貝塚を含む10,169.40㎡が国史跡に指定される(昭和46年12月15日)。

昭和46～47年 愛知県教育委員会、第二次予備調査を実施。

昭和47年 愛知県教育委員会、先の予備調査を受けて、環状2号線建設に伴う本発掘調査を開始。昭和55年まで継続。



昭和47～48年 春日村(現清須市)教育委員会、寅ヶ島貝塚・竹村貝塚を調査

昭和50年 4月、愛知県清洲貝殻山貝塚資料館開館。

昭和56年 財団法人愛知県教育サービスセンター埋蔵文化財調査部発足。環状2号線関係の発掘調査を引き継ぐ。

昭和60年 財団法人愛知県埋蔵文化財センター創立、環状2号線関係の発掘調査を引き継ぐ。発掘調査は平成元年まで継続。

玉作工房跡(昭和60年)、逆茂木と乱杭・ヤナ・大型方形周溝墓(昭和61年)、埋納銅鐸(平成元年)等重要な発見相次ぐ。

- 平成7・8年 貝殻山貝塚資料館拡充整備計画に伴う発掘調査。
弥生前期環濠検出。
- 平成10年～ 愛知県埋蔵文化財センター、近畿自動車道名古屋関線清洲JCT建設及び県道
高速清洲一宮線建設に伴う発掘調査を開始。平成16年まで継続。
- 平成13年～ 名古屋市教育委員会、市営平田住宅建て替えに伴う発掘調査を開始。
最古級の銅鐸鑄型の発見（平成16年）
- 平成16年～ 愛知県埋蔵文化財センター、近畿自動車名古屋関線清洲JCT・名岐道路・県
道高速清洲一宮線及び県道高速名古屋朝日線建設に伴う発掘調査。平成19
年まで継続。
- 平成24年 朝日遺跡出土品2,028点が国の重要文化財に指定される（平成24年9月6日）。

発掘調査報告書

* 本書掲載資料関連分のみ掲載

- 愛知県教育委員会 1972 『貝殻山貝塚調査報告』
- 愛知県教育委員会 1975 『環状2号線関係朝日遺跡群第一次調査報告』
- 愛知県教育委員会 1982 『朝日遺跡 ～ 』
- 財団法人愛知県埋蔵文化財センター 1991 『朝日遺跡 』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第30集
- 財団法人愛知県埋蔵文化財センター 1992 『朝日遺跡 』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第31集
- 財団法人愛知県埋蔵文化財センター 1992 『朝日遺跡 』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第32集
- 財団法人愛知県埋蔵文化財センター 1993 『朝日遺跡 』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第33集
- 財団法人愛知県埋蔵文化財センター 1994 『朝日遺跡 』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第34集
- 財団法人愛知県教育サービスセンター-愛知県埋蔵文化財センター 2000 『朝日遺跡 』愛知県埋蔵文化財
センター調査報告書第83集
- 財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター 2007 『朝日遺跡 』愛知県埋蔵文化
財センター調査報告書第138集
- 財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター 2009 『朝日遺跡 』愛知県埋蔵文化
財センター調査報告書第154集

発掘調査のあゆみ

朝日遺跡

よみがえる弥生の技

発行日 平成25年3月20日

編集発行 愛知県教育委員会

〒460-8534

名古屋市中区三の丸三丁目1番2号

印刷 新日本法規出版株式会社
